夢考句集

下

蕉志句集秋之部

立秋

流ゆく芽の物よりもるやけさの秋

響とめく蟬も立やうたはれ秋

秋風や一むら雨乃京より

虫の音はしたゝ蔀戸やとゝ乃妹

忘ては秋風乃ふくうゑ

一葉

ひけるのまくら舟より一葉ふる
雁淵と言しく桐の一葉こゝに
糸きて琴もきるや桐乃秋

七夕

はやすゝき簾はゝん星ぬる秋
鶏や横ゝ横ゝあまりてをつし
星ゝ琴こゝろゝ文月端居哉
京角や素絵永社ゝく土

星まつる小舟をさしゝく
星ゝ言ゝ吉社橋こゝけよゝや言
紙屑人ゝゝゝゝめゝ紙て
老居しゝく星の一秋ふゝゝん
七種や萱ゝゝゝめて萩ゝ家
八日星
立琴も森せゝや星の二日弾
秋茶

幕や秋さ紅うつりあり
ひさうはや移まかりの幡をく人
我をのるを折をさひし女郎花
賜捨ふるひるをうり女郎花
荒数れ中下ゝ渡りををゝ

六百番うたあはせ

六百の井やををるを志の菊

阿房宮賦をよむ

鬼灯や三ゝ人乃秋れこゝ
蓼の花風れのちをさうゝ風
松風れ立ゝ根ゝ蔦ゝ藤ゝ
淋しさの新くゝ藤ゝ紅ゝ
ムをゝるゝかゝてハさひし鶏風

鶴茶

春ゝ立ゝ人の新ゝ玉まゝ
世の中や朝もゝ鶴ゝ

元禄の新涼をむかへて

遠火やちひさき蚊の新

はつ雪よ懸崖の蔦さそ吳服屋

人のきく番しちらす玉章

焼茄

あらしきに松ふく秋あり焼茄

焼茄の中ゝさびし揚焼茄

焼茄やあをつくる風の音

秋風や人まつ門の遠く鐘

京まくら

花ゝ木に猿人遠き松ちる

稲妻

稲妻や閑さく淺く石階乃関

いかゝ川海や椿の赤面のかくさ

冬鶯

刈跡の落穂をあつめこなす

奥州田玉川

追立て叉雲つたふ川水

稲

夕風や露もこぼさぬ稲むしろ

後府竹林精舎

はきゝ石拾ひ笠にみ笠一ぱい

蓮華花をみ笠に盛るやあまつ

この二句を父母母しく

刈こぼす田つゝみ焼しみ笠一ぱい

明る

引あけて松の唐松や明る縄

活て居る角のうらゝかや明る引

添水

秋風の声を切こと添水哉

身細くこぼし減して添水哉

棄山子

人出てやりあれば立ち寄る山の秋

河内路をゆくとて

楠はしらひ見せもあかうしろ

秋蝿

飯を追て遠くまるたり秋の蝿

秋蝶

ふる里をやりあみあるあ秋の蝶

茅舎をたゝまるや秋は蝶

蟬

日暮てもはたを鳴たり蟬の声

服をぬぎて立森ありて蟬の声

十そうり耳ある秋之蟬乃こゑ

蟬の声やてらてらけて蟬の声

我新はは蟬とまむ秋やさるくて

冬瓜の備はきりく秋

切はなくて蟬なしきるくて

人ちうに命よりあきらくす
朝や蟬を殘事法　秋雲声

文月十日あまり天府雅君と百法
法庵の月いとたうしくなりていまさ殺の里
塩うに紅法をもてうしの人々伴なる
出うに来の家形り砂糖を

晴嵐

ううく系れ日暮るおうして晴嵐求

雪

見業系を海糖ぬ川雪百より
松濤ふく

新雪や訪うう意のみ松し海

秋風

秋風やううてある月一系より
秋風や片狩り加様の鄙
秋風や人ようけ法協の系
蜂の風変蓋よ敷を見身より

高館懐古

前後の戎衣一すじおくり泉の
さくんあるところよ大路より車のりあと
はたりしたの家くハ影むかひてら
ちきりくいとめてし蛾のごとく丹
あつ海辺る人も就あるところ遠うてる
いにしへ人もたゝかひきりめ手を
金鞍よきとうりたるやうなる房は
銀鎧をとうさすがるる柳さ所さ
ゝりうの琴ひきをたやさ風うの音
ゆゝ和のこゝろ神を祭るこゝ壇と

加てく程四方の風色をいとゝ哀れ深ハ
のゝとゝもたゝまとゝのをゝいかゝ
武弘の離情をたゝこゝ哀門ハ生りて
生くさたて波をゝちゝ色と源をゝ
流をゝくく哀ゝ歌ゝもれさし月の
山をゝかうれて湧白ゝ山はるのあけ
方のゝとおりふ玉ゝや海宝根山たて
ゝ称ゝゝゝれのくもゝひえいゝせゝ乃
ゝゝハほゝきすれいゝせゝりて
いゝるれ里ゝ本ゝ志ゝゝ金鈴山ハ
ゝゝ門きを敲して時ゝこゝ涙ゝを

和さうの仏をとゝ毛氏なる北堂塔
四十余稱房四百餘字中ゆる寺金色
堂經堂吉祥堂あるゝ神社仏閣
山くゝ日くゝ映〳〵水ゝうゝやく
かゝん法くゝえその柵を義を和泉之国の
岩ふしゝく碧流岸をうち小上川ま
高くゝ言ゆゝ緑ゝゝゝり源延尉ま
加〳〵法ゝゝ法屋〳〵きく八荒里の
小屋を遠るこうきくゝあるまをこう
うみとうゝ川まいく秀衡一門の栄華
きくゝゝゝゝゝあるゝ口伝

あゝんゝゝゝ風を裂麟を切合
目をとゝうこゝもるゝは炎天を
梅花を去れさうゝもゝこゝ乃
ゝきゝゝおくれゝゝゝゝゝゝふ
露ゝゝ九年のちまゝゝゝ秋を風
義は十年浦ゝゝ百代をこゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ今ゝ

山ゝゝゝ川おくれゝゝ秋ゝ風

紀庵嘉兵衛宅居留別

名ゝゝ川細ゝおくれゝく素乾の

ゑさるゝ門しいなしへれ紅葉の雨
影もわりひめゝ

跡先ハみゆきし持ぬ秋の蝶

秋浦吟

秋風や硯をあらひくされさき

必観亭人の宋亭に千歳日の残暑と
まるゝれ侍りて

干てある鑓に来かゝり秋乃風

秋柳

いそうしや枝ひ色しらく萩柳

花野

ゆくし野もりゆく里ある花野哉

追剥に取ハふりたる花野哉

秋夜

合歓の来れ枕辺のせん老の秋

須磨

宿借て森さめ志らぬや波戸の秋

近江湖水

秋の水と富士を写してすみきれる

ある人よりそふれて

吟ずるに七玉川や鮎は秋

上総手賀沼

ちぢ波の漕よあつまやそなたは

露

白露は果てあり玉六玉川

農家八十の老を賀しく

来の秋杵ふりかけるあつれ

秋蕎

百回を一里くと秋の蕎

稜津さよ乃ゆるも見えて秋の蕎

潮見坂

永ちく海とは見えた秋の蕎

蕎畑ちり新見合せく秋のくれ

眠秋と墨水よ拾ふ

木毎ちをかるるかりの秋のくれ

家庭錦窓と立る秋の雲

言語も帆檣

捨てゆく人の後帆ちゝ秋と秋乃雲

言鉢る毛氈寺壊古

磯城かゝ行きして蝶の雲

蕎麦花

懶雲の間まも後庭や蕎麦花

蕎麦椒

傾懶れ不屋おそろし蕎椒

飄

うこゝとまる花の行るゝ式

屋

二階くとうゝて悲し屋ゝ川

初屋や平砂よゝ舟の氣

初房や小牛と藤の子のうへ

小房

連蕉や[illegible]松乃中

影は来て一荒見[illegible]

[illegible]の一枝[illegible]

[illegible]

文殊寺納

山茶や[illegible]

武庫山

武庫山の眺さすがに[illegible]

十徐浦法ひ二句

釣風や小茶の[illegible]

鶏鳴や漁家をへて[illegible]

芭蕉

[illegible]

[illegible]

柿

柿の木の時めく柿の木来うれ
深柿や代々の家も擬強し

結實

結實や三つ四つ五つ母恋
[illegible]

良夜

[illegible]

二別格遠接石の莊

[illegible]

田家にあそびて

深雲月明るうちやうちの乃舟

佐八百屋の門やうちの舟

深川舟遊

川上佐川下やとの表と表紙翁の

中さしーみ本松もちーつ本沈もうち

十人の月見れたや松もうち

麻布

名所を神代の富み見こうれ

名月や行く末も清しい仏

名月や起うちうと西の月

名月や生れかりうと雲の松

名月や月より外よう後もかし

名月や須村の松乃真赤うれ

名月や蛇をけそ風もこうちを

一谷

物さうの奈まる波や浜ケの真

十六夜　紫屋もろく

いさよひや国々あまる廉の声

十六夜や古ひの国の横さま

初汐

月汐や竹の音人乃声

地引

金屏よ面白いつる地引網

岩瀬北鶯吹くるが地引網

弱近

旅人のもの一里振るや弱むく

弱年や日やけて甲斐の思おもこ

相撲

大内北形を古度や相撲を

志ほらしやや条ふる角力乗

女郎と指首指ひりきまふり

こちらるや見る国のおよ相撲を

賤江亭

相撲とるおとこいくさを庭の秋

夜長　新編

まがきまさきさかえたれば秋長き

竹葉ちる枝葉者の秋長の月

四十うち酒のさかなに秋長の秋

星を今絃あるうしの日和哉

菊

菊ちるもさきもまがきの菊の花

ものいふ客に亭主白菊と

傾城は枕ふるやの菊清らか

あの家よりうるおれば岡乃菊

白菊や花のこゝろをとく菊の香

蝶ぞ川菊手洛入日和の月

ひと京菊うゑ池やきくの花

古ゑもの数児よりむ菊は酒

渓村重陽

魚の名も菊亀くれたまへくらか
木の百姿
あるこそよ祖父ある菊の山路哉
繁心公小く
こそ〳〵菊やあるくれたまへ
白くもも浮世の名魚や菊のいせ
後月

若この一るる菊れ多あり中十三枝
懶惰ぬ〳〵ぬん毋種あり後の月
白魚れ〳〵こそ乃ちかり
稲穂て里志津っちり後れ春
金沢て
隈〳〵乗海士の樊大中十三枝
新蕎麦
新蕎麦とこそ三盃の麦のうち

新そうや所後そ悔る梅の音

草

草枯や月の千深の小松そう

尾蕉鴨

尾を鎖そく命いそうし鴨の声

そう枯

そう枯や逝ぬあるは丸木橋

そう枯や月の衰そうも日のあい

紅葉

九重を中そ理山の月さかか

掃寄も実つそひし夕ひ点

新蕊そく紅そうそ京の紅葉哉

京の路うちちるのうちこの風

浪芳秋之

乱よりも紅葉ふ点こそ深う舟

志ゆ月さ法師の庭よそ七夜の

屋ちかきあり

屋ちかきや 幹を乾瓶に初紅葉

蛙

蛙よりしく年波よせる蛙うれ
壺墨の新よ出来てきぬさうれ
月よりく法月の裸や小松さあ
粥さうか新うれ 蛙れ指ふれ
あるひとの家居ちかくなりて

松茸や 蛙れ柚味噌も指より
答うけて 柚味噌のうしろ少松茸
茂世氏の壺晩樹ち
ちちはしさ 生身蛙れ死大うれ

蝿

人生ちかの糸とこそきけ蝿の声
蝿れ書や 初ちそ糸れ 蝿れ
新酒 濁酒

山紫と垂れの淀に揺く
新酒あり舟より新に取出せん
濁りなるものもむ抜れ出るり酒

落水

帆のうつるものかけ落し水

九月尽

秋風に木々の出帆入帆の船
漕ぎ行く秋を惜みけり

蓼太句集冬之部

初冬

初冬に樓に入るや寒ぐ

時雨

柿なる志のくや初しぐ
秋風に簑に乾て初時雨
色々ぬ葉に寒ぐ時雨
雲の笠さりて志れ

市中を薊花漂ひ来るなれ

夜庭

傘をもむ音もてそそれ初時雨

そぼ降る松の葉陰なる時雨哉

散まさりゆく我み袋掛る時雨かな

小春

祖師堂の石段白くなほ小春

葉を踏みておかしく惜む小春哉

公方今想夫の笑ふ小春の日

庭面なるはてよく繕ふ小春哉

強飯のくゝるる時

為ぬ月は庭ぬ片り小春風

十夜

我意を強くなりゆる十夜哉

口切

口切や若は價も唐小しき

芭蕉忌

百回忌を七年年の今日まゐりにこして
[illegible]川乗津寺俳諸道立のあり、西上人の
[illegible]の法をもて我死人と添せて遍を思ひ出て

我祈るふ小まこのもや　十二日

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]川[illegible]
[illegible]枯や人[illegible]

落葉

又裏の[illegible]

雜冬

[illegible]の眼れ[illegible]方や石藤の[illegible]
十月のあ[illegible]いそ[illegible]や[illegible]
たゝ[illegible]て罪[illegible]蕃の千葉[illegible]

枯柳

枯柳[illegible]

枯てあるを折の淺衣 可能

冬牡丹

富りとくとをいつくん冬牡丹

妻をくゝ案れあるとやあるらん

枯野

牛の尾れ分るとうゐ枯野かな

るとゝ見ゝ一里ハ来ゝ枯野ゝ

鯨勢

夕雪れ篠のそゝ紀やそゝさゝゐ

見ぬかりよ柏拾ひせんみ雪さゝゐ

冬籠

庚占ゝ先柏待八梅四古りゝ

おりひゝて春見ゝ出ゝ冬籠

海紀

おりてきる地主の木の葉やゝ見冬

妻面とゝ知りゝ見ゝ行りゝ見紀

蓑を脱ぎうてもかしこ帰紀

大桶

こゝ迄居家宮女の中より大桶多

巨燈

燈を吹消されこゝかこの巨燈多

老居して巨燈も園より取る秋うす

極楽は人ゝ也こゝ所多

風

本枯や湖田刈ものハ身をうり

風ありこうし樗て志のさりを

水仏紀

河仏の名は流汝多紀

阪中

きゝ猿を先解別て坂中れ

頓塩の市ゝ迄て阪中多

多多ゝ月秋は坂中哉

紙子　金

拾二匁の京より唐紙ある紙衣うれ

寄八十日の栄を切るに八十日の栄を先

寄れ来るく我れ喜ある紙子こうれ

老営菓

戸をぬるを我弾きう紙をも

茅太根寒るく老を中ありん

細代ちる

世ちをのそつるくを細代れ

ぬくめる

れるをぬんもあるぬくあと

ぬる時を一をん響や熱く老る

新をせ

新をせや白粉も菊の香

ををせや誰を来る扶徒の声

製金

饗宴や紀さける肩ぐ[illegible]

[illegible]

藏主の門ちかくなり[illegible]の声

[illegible]

氷　[illegible]

障子ちるこゑ[illegible]

略主しる[illegible]の氷い[illegible]

一[illegible]ハ入日乃氷[illegible]

炭

[illegible]より[illegible]人[illegible]炭二[illegible]

[illegible]や炭[illegible]

摺大　[illegible]延七面山にて

摺の大や　祖師の加[illegible]も眼のあ[illegible]

[illegible]の大や[illegible]

氷[illegible]

[illegible]一[illegible]離[illegible]乃声

[illegible]や昔の在[illegible]

[illegible]

[illegible]こそ出[illegible]

[illegible]ちる梅出来て[illegible]

[illegible]しくとも[illegible]

[illegible]

[illegible]峰[illegible]や名[illegible]

[illegible]梅の[illegible]

吹[illegible]

雪

[illegible]

[illegible]言のお[illegible]

[illegible]言[illegible]

[illegible]言[illegible]

白[illegible]言の中[illegible]

[illegible]墨[illegible]

偶千對と

掃よせん春のさ清く此二吉蓮广

途中吟

をりかゝる大よあくりけり秋の雲

畠かと八百屋さこりけりや夜乃雲

蓑脱てむより濡萩り雲の衣

おりうしき飯のふ雲の行くらん

鉢扣

鉢たゝき月秋を見えて衰あり

留りふとおめふ秋もあり鉢たゝき

煤掃

をせ紙箱の一とせ冬の籠ありし　橘町
ちゝ居とら川しき

袖の香れ蓑まもゆかりしきて　拂

衣配

七年あり哉衣を着て何の衣配

年内立春

去りしも去年もまたある柳の
年内立春の日まもなくまたかへり
春の日をかりて拾ひやうまた
年忘れ浅きる梶の木はるより
夜寒さかむ年まもれ井八潤家
[illegible]
森羅万象のうち
之絵を廣山れ面やうのまた
古法を知れ

かくて世を離れくるかう年の
年波の流とともにまたまたこれ
我家の戸を家の肆ようくまて麋竜の
拾ひを書こう猶ようこう
金銀をまて拾ふる師走こう分
浮世利の氷ようの師走これ
起されくまたまた栗薯師走これ
伍肆八拝ようのかくて柔肆八拝よるこれ
しし師走こと友のこれ
鼓屋と浮世かくむこうのこれ

節分　茅屋

鬼ハ外福ハ内と豆まくあれ

厄拂跡ゆかぬ庵の月和哥

大豆売る七歩の吟や屋くらひ

宝永

立ちぬ梅の花嵐は去らぬ一日の風

京北名所巡りの茶屋はんとへ寄る茶の菊

巾の素つあり拜をとさうある茶とあるれ

琵琶ちさひしく鶴ハちかやのたち

義経ゆ居の捷さよ名こそ和

こ世方地ゆ藤森して花の食の下ゆせ

蜂山資山の供もまのあるう立さう絲と

橋本と立しさ文や古こそ

碁佐の風俗をうつ矢筬の義経と

ちうく

質ゆ地く抑て身あり年の雪

東方未明衣裳轉倒

祐盛この燈ちく出ちう年の雪

所ちとくまちふ曉ちうより

さすらふ書をく眺めることを

風雅ときく時少し其名ばかり

松の嵐

古郷の集に出

蕉不

今茲丙子年六月世を日我師吏定翁の一周忌にあたりて像前に時菓の奠献侍る紅涙毋筆に深く堪て言ふ事なく嗚呼不像奠を若うして時不幸にして蓼莪頁ものあるに似たり故墨の梅ハ昔かゝらん其花等しくうれと新たにして其秋風に堪て終に世と墨染の袂ぬらしおりひ立めるハ

かのいとなの中より俗たうとくとなけむ人乃
ん中なる〳〵うとなる中なる俳諧の程なを
好く張遊のおりひ出さとされと浮世の塵よ
臨遠〳〵ていまと向上の一路をたとゝさりを
一日蟻考老人と新古の境を論ずるに
及く浜川より此師ある事をとりぬ者なの
指車を得るん此しして俗世の三日とゝよ小春
ゝとあく寒ゝ日なる故人家在桃花ゆく

法〳〵なる日のよそ風ひなる〳〵形て生つを
たゝけゝ主便者ゝ庵よりりりと蕉を
まゝけ寒徒や法く寒月師弟の恩沈
花のよ杉苔苔青葉又年舎名庵あひく
彩を探るゝの俳を試法なる〳〵花て
師恩の始なをける今ゝ紙俳よ立て懐旧月
腸をちさる花ゝ月言花時名年よ稀
月ゝさゝ人て二茶をちよ程思ひあゝて奥の

細石の沢たとり清かしく眺ヤーへる師をてめて
ちをや言添うしく秋より来の初様心いと
仮ちうんをきあくるを見うしめせよとうは
ぬの中のむ乃原れ彩むうよみ出てたかうみ
し秋ちを玉川の春よりけりうる雄の鶯を神の
面目小しく神宝月のちしめいはりよ鳴りぬ
ちを比師ちを添川よいまうるを川上をこの川
ト小月の変とちを世紀義の中さ見しみな松

沿ちうきあうりよ見きんく家堂を社てく
打くむうくてけりあちを市場宮殿のくふして
田文の壌欲菊西角の峰軌をの川うよかふ
ちを西小の山くハ宿下清寿よあうりを
をくくを見れをしこの庭寿せよて拍子
たかうくるまり住る方ハ人よ壌ちて葉つくを
くくを年も菩よはけり宿て義を松清よ社
年るハ卯月中の二日く小名木川を少くうて

先年愚庵の猶蘇をとゞめ給ひし途の赤をいのる
なほ師も山形を見送給ふ縮柳の吟あり
[illegible]麦の穂ちるころきたる所なるを
はつ秋の嵐吹うりかるゝころ離別のあるを
胸よせまりあはれ実其秋中なりひとゝせの涙
小夜けるこのゝ月俳諧武江の本所あるハ深川
ゝゝの人奥羽ゝゝのおもひをなべてゝゝの
ゝゝる堂社をとゝくゝを形をもせりあり

おもひとゝれて老師の元禄あるを主人
かの人いろ服部嵐雪あんとゆゝしの云をあるも
万里を隔ゝを風ゝむうふ馬もおもふ一ゝゝ
ゝゝ山ゝ形く浦おりふ波ゝりかゝて蓑を
江府よたゝをへ八十月六日の夕月東あり
先年柴門のゝゝよかゝぬそうれしゝりゝる
師多とゝて海ゝ文月七日のゝゝ葉月初乃
旅路を告ゝゝ者ハ途中ふしてハ蓑よ逢

ぬるゝと思ひあけさたかしらくも西行法
師ゝとゝろこゝる時も老ゝ涙ゝとゝろ者ゝ
ゝ是ゝゝ御七ゝ也あゝ八ゝ也ゝ八涙ゝ
者ゝ古稀ゝ吾者秋も二十あゝゝ指も
屈ゝて行ゝ師ゝ古稀の齢を踏ゝ分ゝてゝの
蓬ゝたる髪ハ化ゝて白く動揺ゝる歯ハ抜け
落ゝゝ涙ゝゝにあゝゝむゝき白髪の義分ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝ門人ゝゝあゝゝゝハ

ゝゝまゝゝ也図両の一句ゝ南花真人ゝ風ゝ蕉ひ
逢の心ゝゝけゝゝ是ゝゝゝゝゝ義ゝ古ゝ年乃
表ハ後河路や為稿ゝ者ゝゝ人ゝの拙ゝ
法ゝゝ卯月年月の拙ハゝゝゝゝ立ゝゝ者ゝ
ゝ師のいゝ法ゝゝおゝゝゝゝゝゝゝゝの
後ゝゝゝ吾又為枝の駅ゝ暑湿のいゝ
行ゝゝ涙水ゝ月の初年屋ゝゝゝひゝゝハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

愛ふかものゝ悔るかゝらぬ見数も法りなくて
今年も時雨を自をれりゝ古人まいへるのあり
言ハ法くまゝく情を絡るなりゝ法りて
如月面の法より一日一日の秋色を法く卯月を
なりのまゝ述ていさゝか師恩を謝す又は舞ま
義松ゝを結て肖像をうゝ門を拝して
相見ぬ法の門人近くてあつこうしと聞る
旧知の人ゝ一章のもゝあるゝ高ゝ吉

あゝんを言るゝものハ仏暁のゝ称の名々書の
松れあゝし

裴句集跋

守武の神告曰俳諧ハ仏ノ[illegible]ナリ[illegible]ノ[illegible]
[illegible]と好と[illegible]ノ[illegible]種ナリ[illegible]ノ又世の
中ノ[illegible]ナリ[illegible]年や[illegible]ノ初連歌年
[illegible]ノ[illegible]ナル大事ナリ[illegible]ノ[illegible]井ヲ
[illegible]ル時ノ[illegible]ヲ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]
仏入孫ノ[illegible]ナリ[illegible]ハ[illegible]ノ[illegible]
嘱年の角[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

あり弦より叶ひ行くべき山路の中も強うる弦
部一麓まうでと部むるハ西行の先達の志
那して彼岸かもひて行くし其寄る風落く
其花動を盥んまを花ばかり流して
その寄りかゝる柳まきなるハ山里なるまま
取まねるや九つの庵とのまこゝろとなれ
十七の句ばと考しおなくの手小茶とるの
ゆきこの姿と宮殿事ハうゑ紀ふるまうん

堪能の人とゝも句こゝに委迄ほのぼのう
唯事ばかりこゝ部ゆく秋の色史和ゆんこゝ
句の感まるかんこゝ撰ひ集る
うゝは広きを知かりぬ多くの世も意ハ
物ゝ名一今とゝて言ゆゝ踊るゝ火水
うれも異ゝは昔ゝ人もかけきアゝ行の
情ゝ分ゝ花の事ゝ考むゝと分うゝ深ゝ
語る行業の多ゝ古と是んゝ丸格ハ吉人の

あらしふかぬ一きの事ふる今はの事を北向
稿本ふ移すらく中ふ不定見は後我業ふさらん
くもりもいつ一きよりふ絵と今は昔のこと
此度の句集ふ成るは何しらと如林の色ふ
まのせて筆とれのこ

時明和六丑ゑ秋　時乃恵月菓

本町三丁目　西村源六
日本橋二丁目　戸倉屋喜兵衛